

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大西 瞳
2. 審査委員	主 査：伊藤 武彦 副主査：岡本 希 委 員：三村 由香里 委 員：松枝 睦美 委 員：鈴木 久雄 協力者：西岡 伸紀（第13条第3項適用）
3. 論文題目	学校健康診断結果の活用 ―ヘルスリテラシー等関連要因の探究及び促進方策の検討―
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻 生活・健康系教育連合講座 大西 瞳から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和8年2月18日（水） 17時50分～18時30分 場所：オンライン</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 本論文「学校健康診断結果の活用―ヘルスリテラシー等関連要因の探究及び促進方策の検討―」は、児童生徒が学校健康診断の結果をどのように理解し、健康の自己管理へと活用しているのかを明らかにするとともに、その活用を促進する教育的方策を理論的・実証的に検討することを目的とした研究である。</p> <p>第1章 序論 I-1 日本の健康診断結果活用の状況 I-2 日本の健康診断に関する教育 I-3 児童生徒を対象とした健診結果活用に関する研究の動向 I-4 成人を対象とした健診結果活用に関する研究の動向 I-5 ヘルスリテラシー I-6 ヘルスリテラシーとの関連性の検証 I-7 研究の目的と論文構成</p> <p>第2章 健診結果活用と理解に介在する要因 II-1 背景及び目的 II-2 方法 II-3 結果 II-4 考察 II-5 結論</p> <p>第3章 健診に関する知識及び恩恵、負担の認識 III-1 背景及び目的 III-2 方法 III-3 結果 III-4 考察 III-5 結論</p> <p>第4章 健診結果活用に関連する要因 IV-1 背景及び目的</p>

- IV-2 方法
- IV-3 結果
- IV-4 考察
- IV-5 結論

第5章 総合考察

- V-1 本研究の成果
- V-2 校種及び性差
- V-3 活用を促す教育と配慮
- V-4 本研究の課題
- V-5 本研究の限界

引用文献

「第1章 序論」では、まずわが国における学校健康診断（健診）の制度的背景と実施状況、健診結果の通知および活用の現状が整理されている。続いて、学校における保健教育の位置づけや学習指導要領との関連が示され、健診が単なる医学的スクリーニングにとどまらず、教育的機能を有する営みであることが論じられている。さらに、児童生徒および成人を対象とした健診結果活用研究の動向が整理され、特に児童生徒を対象とした研究が少ないことが指摘される。その上で、ヘルスリテラシー概念の理論的検討が行われ、本研究ではヘルスリテラシーを健康教育によって強化可能な個人のスキルと定義し、包括的枠組みを採用する妥当性が示されている。最後に、本研究の目的と3つの研究から成る論文構成が明確に提示され、研究課題が具体化されている。

「第2章 研究1」では、健診結果の理解と活用に介在する要因の検討が行われた。仮説モデルを構築し、児童生徒を対象とした質問紙調査を実施した上で、結果の理解、リスクの認識、対策の必要性の認識、予防動機、活用行動との関連を分析している。分析の結果、健診結果を正確に理解することが出発点となり、そこからリスクや対策の必要性を認識し、予防への動機づけが形成されるという段階的過程が示唆された。さらに、校種別および性別の比較を通じて、発達段階や性差によって理解や活用の程度に差異が存在することが明らかにされた。本章は、健診結果活用を単一行動として捉えるのではなく、複数の認知的段階から成る過程として構造化した点に特色がある。

「第3章 研究2」では、健診そのものに対する認識として、スクリーニング知識、健診による恩恵の認識、負担の認識を小・中・高校生を対象に調査している。校種が上がるにつれて知識および恩恵・負担の認識が高まる傾向が示される一方で、負担の具体的内容には発達段階による違いがみられた。小学生では健診後の不安が主な負担として認識されるのに対し、中・高校生では健診時の羞恥心や心理的負担が強く認識されるなど、発達段階に応じた教育的配慮の必要性が示唆された。本章は、健診の教育的意義を再考する基礎資料を提供するものである。

「第4章 研究3」では、ヘルスリテラシースキルフレームワークを理論的基盤として、健康への関心、ヘルスリテラシー、健診結果の読解力、意思決定バランス（恩恵と負担の認識）と活用との関連性を構造方程式モデリングにより検証している。その結果、健診結果が理解しやすいことが読解力を高め、恩恵の認識が高く負担の認識が低い場合に活用が促進されること、さらにその過程に健康への関心およびヘルスリテラシーが関連することが明らかとなった。また、多母集団同時分析により校種差および性差の構造的特徴が検討され、モデルの妥当性が確認された。本章は、理論枠組みと実証分析を結びつけた本論文の中核的成果である。

「第5章 総合考察」では、以上の三つの研究の成果を統合し、学校における健診結果活用を促進するための教育的方策および配慮事項が総合的に論じられている。校種差および性差を踏まえた指導の工夫、健診結果通知の改善、ヘルスリテラシー育成の体系化の必要性などが示され、今後の縦断研究および介入研究の課題についても言及されている。本章は、本研究の理論的・実践的意義を統合的に位置づける役割を果たしている。

2. 審査経過

本審査委員会の審査委員は、提出された学位論文を精読したのち、令和8年2月18日にオンラインで公聴会を実施した。同日公聴会に引き続きオンラインで学位論文の審査と最終試験を行った。学位論文の審査は、以下の点を中心に審査した。

1) 研究の独創性及び発展性

本研究の独創性は次の3点にある。

第一に、学校健康診断結果の「活用」という概念を、制度論的議論の枠を超えて、児童生徒の主体的健康行動の観点から理論的・実証的に再構成した点にある。従来、学校健診は制度的枠組みや実施体制に関する議論が中心であり、児童生徒自身の主体的理解や行動への接続過程を包括的に検討した研究は限られていた。本研究は、理解から活用に至る過程を段階的にモデル化し、共分散構造分析により検証した点で新規性が高い。

第二に、ヘルスリテラシースキルフレームワークを援用し、健康への関心、読解力、意思決定バランスといった多面的要因を統合した包括的モデルを構築した点で理論的貢献が大きい。単一要因ではなく、複数の認知的・心理的要因を理論的枠組みに基づいて統合し、構造的に関連づけた分析は、学校保健領域における理論研究の深化に寄与するものである。

第三に、校種差および性差の検討を通して、発達段階やジェンダーの視点を取り入れた実証的知見を提示したことも評価できる。これは単なる統計的差異の提示にとどまらず、教育実践上の配慮事項を導出する基盤となっている。

本研究の発展性については、横断的研究であるという制約を自覚的に示しつつ、今後の縦断研究および介入研究への発展可能性を明確に提示している点が重要である。特に、明らかとなった関連要因への教育的介入効果を検証する研究へと展開することで、理論的モデルの妥当性および実践的有効性をさらに高めることが期待される。すなわち今後の縦断的検証および教育的介入研究への展開により、学校保健学領域における理論と実践を架橋する研究として発展する可能性を十分に有している。

2) 学校教育実践への貢献および社会貢献

本研究は学校教育実践に対して具体的かつ実践的な示唆を与えている。健診結果を単に通知するのではなく、児童生徒が理解し、リスクを認識し、意思決定へと結びつける支援の重要性を明らかにした点は、養護教諭および保健体育科教員等の教育実践の在り方に直接的な示唆を与える。

また、校種差や性差を踏まえた教育的配慮の必要性を示したことは、発達段階に応じたカリキュラム編成や指導方法の改善に資するものである。健診後の不安への対応、負担感の軽減、恩恵の理解促進など、具体的な支援の方向性が示されており、教育実践学の構築に資する業績である。

さらに、ヘルスリテラシーの育成を学校教育の中核的課題として位置づけた点は、生涯にわたる健康の自己管理能力の育成という観点から社会的意義が大きい。学校段階でのヘルスリテラシー向上は、生徒が学校を卒業したあとの健康管理能力を向上させることで、将来的な疾病予防や医療費抑制にも寄与する可能性を有している。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 大西 瞳 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。